

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02865

研究課題名(和文) コミュニケーション能力育成のための談話展開と効果的な質問に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Discourse Development and Effective Questions for Developing Communicative Competence

研究代表者

世良 時子 (Sera, Tokiko)

成蹊大学・国際教育センター・講師

研究者番号：50621794

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本語のインタビューテストにおいて、話者が意見述べに使用するストラテジーや言語表現、質問者が発話を引き出す効果的な質問、対面かコンピュータベースかという形態が与える影響を明らかにした。データは、日本語の超級話者(OPIというインタビューテストで最も高いレベルだと判定された話者)からインタビュー形式で採取したものを使用し、完遂された意見述べの部分を中心に用いた。コンピュータベースのテストはOPIcを用い、対面OPIと比較した。さらに、研究過程で「質問」力に注目し、「質問づくり」を取り入れた授業に関する実践研究を行った。「質問づくり」普及のためワークショップ等も実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

意見述べは、超級/上級話者に求められる重要な口頭コミュニケーションであるため、本研究が明らかにした論理展開についての知見は教育現場に広く活用できるものであると考え。また、「質問」の持つ力に着目し、「質問づくり」の実践報告・研究を公表してきたことは、日本語教育における「質問づくり」の実践を進め、学習者の思考を深めながら言語学習を促進する方法を知らしめることに寄与したと考える。さらに、研究当時コンピュータベースの日本語口頭能力テストはOPIcが唯一であり、この実践を報告したことも新しい知見を提供できたと考える。

研究成果の概要(英文)：Using a Japanese-language interview test, this study clarified the strategies and expressions used by interviewees stating their opinions, the effectiveness of the questions used by the interviewers and the effects of different test methods. The speech data, which was collected by interview with superior level Japanese-language speakers, was analyzed for the research on how interviewees state their opinions and answer interviewer questions. OPIc (Oral Proficiency Interview on computer) and face-to-face OPI were used to compare the test methods. In addition, we conducted practical research on classes using the QFT (Question Formulation Technique), focusing on the questions in the process of our research. We also held workshops to spread the QFT.

研究分野：日本語教育

キーワード：口頭能力 コミュニケーション能力 談話展開 質問づくり ACTFL-OPI OPIc

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学、企業等における上級以上のレベルの学習者は、抽象的で複雑な話題について、議論したり、インタビューを受けたり、行ったりできるようになることが必要であると考えられる。CEFR や ACTFL Proficiency guideline においても、超級話者の特徴として、具体的/抽象的な話題に関して、詳細な叙述、意見表明、議論展開ができる、対立する意見も考慮した上で効果的で論理的な談話展開ができることとしている。

しかし、これまで、意見述べのように論理的な展開が要求される談話の展開に関する研究は、多くが学習者の作文を題材とした書記言語におけるものであり、口頭表現に関する研究は少なかった。談話の構成/展開の分析には、依頼文のような目的のある会話における談話展開(フォード・三宅 2015)や雑談の展開(筒井 2012)等があるが、論理的な談話展開の方法には触れられていなかった。一方、松田他(2013)は、OPI の超級学習者を対象としているが、結束性を表す指示詞やフィラーの特徴等について分析しており、談話の内容自体については言及していない。わずかに荻原ほか(2001)は、超級話者 2 名の OPI データに関して発話内容や段落構成を分析している。しかし、「事情の説明」「感想の叙述」といったラベリングのみで、具体的に超級たらしめる論理展開が何かを示していなかった。

つまり、超級/上級レベルの口頭コミュニケーションにおいて、どのような質問に対してどのように論理を展開しているかを明らかにした研究は存在しなかったと言える。

2. 研究の目的

超級/上級を目指す中上級日本語学習の口頭表現能力の教育や評価のために、OPI のコーパスデータを分析し、下記の 3 点を明らかにすることを目的とした。

1) 上・超級話者と母語話者の意見述べの談話展開を明らかにする

OPI のコーパスデータを用い、具体的/抽象的な話題に関する意見述べにおいて、どのように例示や一般化、仮説、などを盛り込んで議論を展開しているのかを明らかにする。そのために、話題のまとめり = 「段落」に談話の機能を表すラベリングを行い、談話展開を図示し、共通する特徴をパターン化する。また、超級と上級のレベルの違いによって、談話展開にどのような特徴が見られるかを明らかにする。

2) より深い議論を引き出す質問の特徴を明らかにする

OPI において超級かどうかを判定するために、テスターは話題を抽象的・一般的な内容に移し、裏付けのある意見を求めたり、反論したり、仮説を発展させる質問をしたりして、被験者の談話能力を限度まで引き出す。このようなテスターの質問に注目し、議論を深めるために効果的な質問の組み立てを分析する。それによって、内容を深める質問の出し方や議論の場を管理する司会のしかたに関する教育に応用することができる。また、教育現場での口頭能力の評価にも応用ができる。

3) 質問形態による発話への影響を明らかにする

2016 年より日本語の OPIc である OPIcJ が施行された。Computer-based である同試験では、あらかじめ入力した被験者の自己申告のレベルや興味などにより質問が決まり、その答えを録音することで、発話データが得られる。同時に多数の受験が可能であり、効率的であるという反面、システムがランダムに選ぶとはいえ、決まった質問セットに対する発話となるため、対面式とは異なる側面が多いことが指摘されている(Thompson et al 2016)。そこで同じ被験者への対面式 OPI と OPIc のデータを比較することから、質問形態が談話展開などにどのように影響するかを分析する。

さらに、1) 2) の教育への応用として、学習活動に質問作りを取り入れることに着目した。これは研究の過程で得られた課題である。

4) 質問作りが日本語学習に与える影響を明らかにする

質問作りの手法を取り入れた活動を行い、質問作りがどのように学習を深めることができるか、また、言語形式としての質問をどのように効果的に学習に取り込んでいくかを探り、その効果を検証する。

3. 研究の方法

本研究の 4 つの目的に対して、以下のような方法を用いて、研究を行った。

1) 談話展開の分析手法開発: 談話をその内容や展開によって、部分ごとにラベル付けし、コード化・データ化していくための手法を開発する。

2) コーパスデータを用いた質問と発話形式・談話構造の分析: 上級・超級話者、母語話者の OPI

のコーパスデータから、レベル別の質問の分類、コード化した談話展開の分析、質問とそれに対する発話の影響を明らかにする。

3) OPIcでのデータ採集とその分析：日本語コースにおける学期毎のPre/post テストに OPI c を導入し、データを採集する。同時に、対面式でのデータも取り、両者を文字化し、比較・分析を行う。

4) 質問作りを取り入れた活動の実践と検証：ロススタイン・サンタナ(2015)による「質問づくり(The Question Formulation Technique)」の手法を取り入れた授業活動を行い、その効果を学習者のアンケートや活動の成果物、活動時の発言などをデータとして検証する。また、道田(2011)が Gray(1993)を基にして示した「質問分類のためのカテゴリー表」を用い、学習者の質問の分析を行う。さらによりよいリストの提案を目指す。

研究方法の詳細は4でその成果とともに記す。

4. 研究成果

1) ~ 4) の研究目的に対して、得られた成果を記す。

1) 2) OPI 形式で採取されたコーパスデータを用いて、分析を行った。まず、意見述べの論理展開を分析するため、意見述べが完遂されていることが明らかな超絶話者のデータから、論理展開、インタビューの質問の種類をラベリングし、分析した。その結果、どのような質問で内容が深まっているか、超絶の課題を達成できているか、また、質問とそれにより引き出される論理展開の関係を考察し、談話展開に使用されたストラテジーや有効な言語表現を明らかにすることができた。さらに、ここで得られた質問が発話を引き出し、詳細な叙述につながる思考を促すことから、「質問づくり」の実践研究へとつなげた。

3) OPI c の実施を行い、事前事後アンケートから試験方法に対する評価や学習者自身のパフォーマンスに関する自己評価のデータを採集した。その結果、試験環境を楽しみ、能力が発揮できたと感じられた場合、より良い結果になっていると結論付けることができた。また、OPIc 受験が学習者の動機づけにつながっていることも明らかになり、口頭能力を測る機会自体が学習意欲につながるという示唆が得られた。OPI c と対面 OPI の違いについては、両方受験した学習者に方式の好み、その理由と判定の関連等について調査を行った。この結果とこれまでの OPI c 実施実績とを合わせて、2020 年度中に発表する予定である。

4) 1) 2) についての成果から、「質問づくり」を読解、聴解、口頭能力養成等のクラスに取り入れ、その具体的な方法や効果の検証を、学習の内容面、質問を含む言語の形式面の両面から行った。内容面では、「質問づくり」を経験することにより、より深い思考が促されていることが示唆された。また、プレゼンテーション作成過程等では、問いを共有することが聴衆の理解に何が重要かを意識づける役割となっていることを明らかにした。

言語形式の面では、口頭発表における「~でしょうか」などに代表される学習者の習得が進みにくい形式について分析し、これらの習得を進めていく方法を検討した。

さらに、批判的思考の養成を図るために、読解の授業において先行研究の質問リストを使用し、学習者の作った質問の分類を行った。その分類を基に、「質問リスト」作成に着手し、学習者が「質問リスト」を活用する実践へと発展させた。

これらの研究を進めると同時に、「質問づくり」に関するワークショップの実施も行い、広く発信することに努めた。

以上のように、コミュニケーション能力育成のための談話展開と効果的な質問に注目した本研究は、学習者の言語使用の実態を明らかにするだけでなく、教育への応用に発展させることができた。特に、「問い」「質問」が大きなキーワードとなり、その後、本研究による成果発表後、「質問づくり」を日本語教育に取り入れる動きが進んだと考えられることから、本研究は日本語教育に対し、ある一定の影響を与えることができたのではないかと考えている。さらに、対面 OPI と OPIc の比較についても、日本語を扱ったものはまだ発表されておらず、本研究の成果が、新しい知見となり、今後の日本語教育に寄与できることが期待できる。

【引用文献】

荻原稚佳子・齊藤眞理子・増田眞佐子・米田由喜代・伊藤とく美(2001)「上・超絶日本語学習者における発話分析 発話内容領域との関わりから」『世界の日本語教育 日本語教育論集』11, 83-102, 独立行政法人国際交流基金

ダン・ロススタイン, ルース・サンタナ著, 吉田新一郎訳(2015)『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論 真丸真澄(2006)「日本語の討論の談話における「意

見表明」の構造分析」『早稲田大学日本語教育研究』9, 23-35. 早稲田大学大学院日本語教育研究科

筒井佐代 (2013) 『雑談の構造分析』くろしお出版

フォード丹羽順子・三宅和子 (2015) 「学習者のコミュニケーション行動に対する母語話者の違和感 - ロールプレイにおけるモニタリングの分析を通して - 」『佐賀大学全学教育機構紀要』第3号, p.87-98. 佐賀大学

松田真希子・岩永愛子・庵功雄 (2013) 「超級日本語話者の談話特性 テキストマイニングを用いた分析」『国立国語研究所論集』5, 43-63, 国立国語研究所

道田泰司 (2011) 「授業においてさまざまな質問経験をすることが質問態度と質問力に及ぼす効果」『教育心理学研究』59, 193-205.

文部科学省 (2019) 『平成30年度文部科学白書』文部科学省

Gray, P. (1993). Engaging Students' Intellects: The Immersion Approach to Critical Thinking in Psychology Instruction. *Teaching of Psychology*, 20(2) .68-74.

Gregory L. Thompson, Troy L. Cox, Nieves Knapp (2016) Comparing the OPI and the OPIc: The Effect of Test Method on Oral Proficiency Scores and Student Preference, *ACTFL Foreign Language Annals vol.49-1*, 75-92. ACTFL

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 世良時子	4. 巻 25-2
2. 論文標題 「質問づくり」を用いた口頭発表の授業	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19022/jlem.25.2_12	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 堀恵子・大隅紀子・世良時子	4. 巻 24-2
2. 論文標題 質問作りの手法を取り入れた読解授業	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19022/jlem.24.2_58	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 世良 時子	4. 巻 51-2
2. 論文標題 CLD生徒であった大学生の日本語能力に関する考察 - OPIによる縦断データの分析から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 成蹊大学一般研究報告	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 堀 恵子	4. 巻 1
2. 論文標題 質問づくりを取り入れた読解活動 -グループ活動に対する学習者の捉え方を焦点に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 118-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堀恵子	4. 巻 30
2. 論文標題 文系学部留学生を対象としたクラスにおけるビブリオバトル実施-要約に焦点を当てた授業において-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議(2017)論文集	6. 最初と最後の頁 156 - 166
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計17件(うち招待講演 1件/うち国際学会 11件)

1. 発表者名 世良時子
2. 発表標題 「質問づくり」を用いたプレゼンテーション作成
3. 学会等名 カナダ日本語教育振興会2019年度年次大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀恵子・大隅紀子・世良時子
2. 発表標題 OPIの質問内容による難易度の違い:「きっかけ」を聞く質問を焦点に
3. 学会等名 第1回日本語プロフィシェンシー研究学会国際大会(第12回OPI国際シンポジウム)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀恵子
2. 発表標題 質問作りの実践が質問文作成に与える影響
3. 学会等名 2019年日本語教育学会春季大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀恵子
2. 発表標題 クリティカル・リーディングを焦点とした質問づくり
3. 学会等名 第31回日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀恵子， 大隅紀子， 世良時子
2. 発表標題 OPIの質問内容による難易度の違い：「きっかけ」を聞く質問を焦点に
3. 学会等名 第1回日本語プロフィシエンシー研究学会国際大会（第12回OPI国際シンポジウム）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀恵子
2. 発表標題 質問作りの実践が質問文作成に与える影響
3. 学会等名 2019年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀恵子
2. 発表標題 クリティカル・リーディングを焦点とした質問づくり
3. 学会等名 第31回日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 世良 時子、大隅 紀子、堀 恵子
2. 発表標題 ワークショップ：「質問づくり」を取り入れた授業実践
3. 学会等名 東京女子大学GUの会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 世良 時子
2. 発表標題 「質問づくり」を用いた口頭発表の授業
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 世良 時子、大隅紀子、堀恵子
2. 発表標題 質問づくりを取り入れた授業活動の紹介
3. 学会等名 日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀 恵子・世良 時子・大隅 紀子
2. 発表標題 質問作りの手法を取り入れた口頭表現能力向上の試み
3. 学会等名 小出記念日本語教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀 恵子
2. 発表標題 質問作り」を取り入れた口頭発表の指導 - 「でしょうか」を中心に -
3. 学会等名 国際シンポジウム「新世代の日本語学習」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀 恵子
2. 発表標題 質問作りが読解活動に与える影響
3. 学会等名 日本語教育連絡会議(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀恵子・大隅紀子・世良時子
2. 発表標題 質問作りの手法を取り入れた読解授業
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀恵子・大隅紀子
2. 発表標題 上・超級話者の発話を引き出すための談話展開と効果的な質問
3. 学会等名 2017年第11回OPI国際シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 世良時子
2. 発表標題 CLD生徒であった大学生の日本語能力評価に関する考察 - OPIによる縦断データの分析から -
3. 学会等名 2017年第11回OPI国際シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀恵子
2. 発表標題 文系学部留学生を対象としたクラスにおけるビブリオバトル実施-要約に焦点を当てた授業において
3. 学会等名 第30回 日本語教育連絡会議(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	堀 恵子 (HORI Keiko) (70420809)	東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員 (32663)	